

イタリアとギリシャがない欧州はない 鈴木幸一 III会長

2019/7/16 4:30 | 日本経済新聞 電子版

突然、眠り病に襲われる。ひと仕事終えて週末、イタリア国境に近いルガノに、ゆっくりひと休みしようかと寄ったのだが、翌日の朝から眠り病にかかったように、目が覚めない。どこの国の、どんな都市に泊まっても、朝の3時前には目が覚めるのだが、目覚めたのが朝の7時半、そのまま、うつらうつらとベッドに横になっていたのだが、目覚める気配がしない。意を決し、ベッドから起き上がり、シャワーを浴び、朝食をとり食堂に行く。珈琲（コーヒー）を飲み、パンをかじり、ぼんやりと外の景色を眺め、すずめが床に散らかったパンくずをついばむ様子を眺めていたら、1時間ほど過ぎている。



経営者ブログ

ビジネス界のご意見番ともいえる一流経営者本人が政治・経済に関する日々の思いなどを綴ります。ビジネスパーソン生き方のヒントが満載です。随時掲載

さほど、暑くはなかったので、散歩をする。湖畔のベンチに座り、景色を眺めているはずが、いつの間にか、うつらうつらしている。片付けの終わった部屋に戻り、ちょっとベッドに横になったはずが、昼を過ぎている。どこまで眠るのだろうか、そのまま、目をつぶって横になっていたら、今度は、深い眠りの昼寝となってしまった。

結局、夕暮れまで、うつらうつらとベッドに横になって過ごしてしまった。眠り続けた時間が長すぎたようで、夕暮れ前には、めったに見ない夢を見続けていたようだ。1日15時間は、眠っていたような気がする。バーでネグローニを飲み、夕食をとり、部屋に戻ると、今度はそのまま眠ってしまった。翌日の朝も、目覚めたら8時前だった。

身体も精神も、すっかり弛緩（しかん）してしまったようだ。

「それが昨夜は、《蛹》という感覚ではなく《ラ・クリザリデ》という新しい不透明な粘膜に包まれながら眠りに落ちていった。この部屋がぼくは気に入っている。それは何よりもこのベッドの上での目覚めの瞬間が好きだからだ。目を覚ましたときに、自分が闇のなかに封じこめられている。僕は目を閉じる。同じ闇のなかに自分がある。念のためにまた目を開ける。しかし視界は相変わらずの闇だ。」（「イタリアをめぐる旅想」河島英昭著）

私が眠り続けたホテルの部屋は、夏の日ざしが、開け放たれた窓から、いっぱい差し込んだ明るい部屋で《ラ・クリザリデ/la crisalide/蛹（さなぎ）》というイタリア語の包み込むような閉ざされた闇の感覚はない。ただ、ひたすら眠りをむさぼっていただけである。ふと、この文章を思い出したのは、眠り続けた夕暮れ、次々と浮かんだ記憶にも残らない短い夢のせいかもしれない。日本語の《蛹》でなく、イタリア語の《ラ・クリザリデ》という「イタリア語の粘膜に包まれて」というのは、まさに河島氏のすごいところだと、感嘆するのだが、私など、長年にわたってたびたび訪れてはいても、イタリア語の理解がおぼつかない人間には、もったいない話である。



ミラノ駅の混雑

夏の盛りに、ボローニャから電車で1時間ほどにあるラヴェンナを訪れるようになって10年を超す。せいぜい1泊2日程度の滞在なのだが、ここ15年近く同じような旅をしている。ミラノから高速特急で1時間、ボローニャで乗り換えて、ローカルな列車に揺られて1時間、のんびりと移り変わる車窓を、半ば眠りながら眺めていると、紺青の空に日が照りつけるラヴェンナに着く。ビザンチン文化の遺跡が残り、かつては法王庁があり、ダンテの墓がある。世界遺産になっている街だが、ひっそりとしている。紺青の空が広がり、強烈な日が差す夏の昼下がりなど、通りは人の気配が消える。バスタブもない、ほんとうにちいさなホテルに泊まる。日暮れまで、窓を閉じてひと休みする。

ラヴェンナは長いこと、「東京・春・音楽祭」を支援していただいている世界的な指揮者リッカルド・ムーティさんの住まいがある場所であり、奥様が生まれ育った地である。その地に音楽祭が始まり、今年は30周年である。2日間ほどの滞在では、ラヴェンナの音楽祭のいちばん大きな演奏会であるムーティさん指揮の記念演奏会に出掛け、終演後、ムーティさんと深夜の食事をする。毎年、ラヴェンナの日程は、それだけである。

街を訪れる日本人は少ないようで、毎夏、必ず訪れる私などよほど珍しいようで、日本人を見れば鈴木さんとなっていると、言われることがある。知り合いのレストランの親父さんなど、「スズキさん、寄っていき」とメールで確認し、声を掛けてくれる。会えばこちらの能力におかまいなく、イタリア語でまくし立てる。聴いているふりをしているだけで、喜んでくれてい

る。おいしい料理をたくさんごちそうになるのだが、料金は一切取ってくれない。「払わせないと、もう来ない」と言うのだが、まるで無視される。そうやって10年も付き合っている。3年ほど前に、後継ぎの息子さんが結婚するとかで、東京に奥さんになるという美しい娘さんと一緒に行くと連絡があって、何軒か日本の料理屋さんを紹介して、とても喜ばれた。イタリアは、まずなによりも「家族」の国である。日本では失われた濃厚な関係である。それが煩わしいのかどうか、よくわからない。

イタリアの経済といえば、いつも欧州連合（EU）の問題なのだが、危機慣れというか、その実態は、ぎりぎりの段階で一般に想定する以上に強いようで、大きな破綻とはなっていない。

「ミラノは、あちこちで大きな工事ですね」「イタリア経済は、いつもながら大きな問題となっていますが、ミラノの経済成長率は7%を超えています。ご指摘の通り、街中、クレーンが見えるほどですから。北イタリアと他の経済圏との格差は繰り返し指摘されて、いまだに北イタリアとナポリ以南の2つの国になっていたら、北イタリアは最も成長率の高い経済圏だったはずという話は、変わりませんね」。長くミラノに在住している日本のビジネスマンと話し込む。

「トスカーナのシガーの置いてあるホテルのバーに行きませんか」。そんな誘いに乗ったのだが、ホテルのバーでトスカーナのシガーを注文したら、キューバのシガーしか見つからず、結局、イタリア産のシガーの香りを楽しむことはできなかった。ミラノに来て2日ほど経たら、眠り病も収まってきたようだ。

ラヴェンナでは、30周年のムーティさんのコンサートを聴いた。アテネでギリシャの演奏家と一緒にベートーベンの第9交響曲を演奏してきたようで、同じ形の演奏だった。演奏会の前に楽屋によってお茶を飲んでいた折、アテネの演奏の後に、短いスピーチをしたのだと話してくれる。「イタリアとギリシャはいつも経済問題で批判を浴びているのだが、それはそれとして、ギリシャとイタリアのないヨーロッパというのは、考えられない話だ」と。確かに、普通に考えれば、ムーティさんの言う通りでもある。

鈴木幸一 IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します。



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.